

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370434

研究課題名(和文) 非定形節の格フレームの通言語的研究

研究課題名(英文) A Crosslinguistic Study of Case Frames in Nonfinite Clauses

研究代表者

中村 渉 (NAKAMURA, Wataru)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：90293117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は不定詞補部の格フレーム，特に不定詞補部の主語の格標示の通言語的変異を，役割指示文法(Van Valin 2005)の文の層状構造と層状構造を踏まえた複文構造の類型論，格付与制約群，格標識の有標性階層及び格付与領域を前提として解明した。具体的には，まず，ロシア語とアイスランド語のコントロール構文の不定詞補部の主語の格標示(与格・主格)を両言語の格付与領域(ロシア語＝節，アイスランド語＝中核)と格標識の有標性階層から導いた。次に，日本語の願望構文の不定詞補部の主語の格交替(主格と与格)を，願望構文が伴う複文構造の相違(中核従位接続・中核等位接続)と日本語の格付与領域(中核)から導いた。

研究成果の概要(英文)：This research has explained the crosslinguistic variation of the case-marking of subjects of infinitival constructions within the framework of Role and Reference Grammar (Van Valin 2005), in particular the layered structure of the clause [LSC] and the typology of complex clauses based on the LSC, the set of case assignment constraints, case hierarchy (markedness hierarchy of case morphemes), and the domain of case assignment ("core" vs. "clause"). Specifically, this research has not only derived the contrast between Russian and Icelandic with respect to the case-marking of their infinitival subjects from the domains of case assignment in the two languages and the case hierarchy, but also has accounted for the case alternation of infinitival subjects of desiderative constructions in Japanese from their syntactic structures (core subordination vs. core coordination) and the domain of case assignment in Japanese.

研究分野：言語学

キーワード：格 役割指示文法 非定形節 格階層

1. 研究開始当初の背景

従来の格に関する類型論的研究は、定形節における単文及び複合述語文(例:使役構文)の格フレームを中心に進められてきたが、非定形節の不定詞補部(節内で主語として生起する場合も含む)、特に、コントロール構文が伴う不定詞補部の格フレームの研究は、個別言語の研究又は少数の印欧語(例:アイスランド語⇔ロシア語)の対照研究に留まっていた。通言語的に見ると、不定詞補部は定形節と同じ格フレームを取る場合とは異なる格フレームを取る場合に大別される。前者の場合は、不定詞補部の(意味上の)主語は定形節の主語と同様に主格標示を受けるが、後者の場合は、不定詞補部の主語は斜格標示(例:与格, 対格, 属格)を受けることがある。先行研究では、不定詞補部の主語に斜格標示を付与する手順が言語によって異なるため、不定詞補部の主語の格標示の通言語的変異が生じる原因も未解明のままであった。申請者は役割・指示文法を踏まえた格フレームの類型論を提案し、使役構文、心理動詞構文、所有者上昇構文、適用態構文等の格フレームを記述してきたが、これらはどれも定形節の単文又は複合述語文(例:使役構文)であり、動詞の項として生じる非定形節の不定詞補部の格フレームの変異の説明が検討課題として残されていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、不定詞補部の格フレーム、特にコントロール構文に生じる不定詞補部の主語の格標示の通言語的変異を、主格標示付与規則の適用領域及び格標示の有標性に基いて統一的に説明することである。具体的には、役割・指示文法の文の層状構造(内核⇔中核⇔節)を前提に、①格標示付与制約の適用領域は「中核」、「節」に分かれること、②格標示付与規則の適用領域が「中核」の場合:「中核」に相当する不定詞補部の主語は主格標示を取ること、③主格標示付与規則の適用領域が「節」の場合:不定詞補部の主語が主節のコントローラーに「構造共有」される場合には、コントローラーと格標示を共有し、「構造共有」がない場合は、当該言語の格標示の有標性に基き、主格標示の次に無標的な格標示を取ること、を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

印欧諸語、フィン・ウゴル諸語、日本語等の資料を収集し、不定詞補部を伴う構文(例:

コントロール構文、繰り上げ構文)に関する文献及び母語話者の調査を踏まえて、役割・指示文法の理論的枠組みを前提とした上で、動詞の項としての不定詞補部を含む構文の構成素(層状)構造を同定した後で、不定詞補部の格フレームを比較し、格標示付与制約の適用される格付与領域(「中核」⇔「節」)に応じて、不定詞補部の主語の格標示(主格⇔斜格)が決まることを示す。

具体的には、ロシア語、アイスランド語の不定詞補部の格フレームの説明を他のスラヴ諸語、ゲルマン諸語を初めとする印欧諸語、フィン・ウゴル諸語の不定詞補部の格フレームへと拡張することを試みる。

また、日本語の不定詞補部を伴う願望構文において、主語項が願望する事象の実行者を示す不定詞節の意味上の主語の格交替(主格⇔与格)を願望構文の構成素(層状)構造を同定した上で、日本語の格付与領域が「中核」であることを踏まえて、上述の格交替を導くことを目指す。

4. 研究成果

まず、印欧諸語、フィン・ウゴル諸語の不定詞補部を伴う構文(コントロール構文の不定詞補部)の格フレームを文献等で調査し、不定詞補部の主語が表層に実現されていない場合は、不定詞補部の主語を修飾し、格の一致を示す遊離数量詞/二次述語の格標示を手がかりとして主語の格標示を推定した。主な研究対象は、ロシア語、アイスランド語、日本語の不定詞補部の意味上の主語の格交替である。

ロシア語、アイスランド語の不定詞補部の主語の格標示は主語と一致関係にある二次述語、形容詞の格標示から推定できる。不定詞補部の主語の格標示は、そのコントローラーの格標示と一致する場合と一致しない場合がある。後者の場合、不定詞補部の主語は、ロシア語では与格標示、アイスランド語では主格標示である。

役割指示文法の節の層状構造及びそれに基づく接続構造(複文構造)の類型論と格標示の有標性階層である格階層を前提に次の提案を行った。

不定詞補部の意味上の主語とそのコントローラーが構造共有(structural sharing)の関係にある場合、両者は格素性を共有し、格標示が一致する。一方、構造共有の関係がない場合、格付与制約(後述)の適用領域の変異(アイスランド語は中核、ロシア語は節)

から、アイスランド語では不定詞補部（中核）の主語は主格標示であるが、ロシア語では不定詞補部の主語は主格標示を受けられず、格標示の不在を防ぐため（格階層に従って）主格の次に無標的な与格標示を受けると考える。なお、上述の格付与制約は以下の通りである。

- (1) a. ある項が主格標示を受ける。
b. 非マクロロール項は与格標示を受ける。
c. 受動者項は対格標示を受ける。

次に、補助形容詞「ほしい」を伴う日本語の願望構文のテ形接続の補部節の意味上の主語の格交替の説明を行った。例文は以下の(2a, b)である。

- (2) a. 太郎が花子にワインを飲んで欲しかった。
b. 太郎が花子がワインを飲んで欲しかった。

「ほしい」の補部の意味上の主語項が有生名詞であれば、主格標示と与格標示のどちらも可能である

役割・指示文法の接続構造（複文構造）の類型論に基づいて、上記の格交替を導くことを提案した。具体的には、接続構造は①結合する層のタイプ（連接：内核／中核／節）及び②層の結合様式（接合：等位／連位／従位）を組み合わせることによって、合計9通りに分類されるが、(3a, b)が示すように、中核操作子の否定辞が生じることが可能であることから、(1a, b)の補部は中核に相当する。

- (3) a. 太郎が花子にワインを飲まないで欲しかった。
b. 太郎が花子がワインを飲まないで欲しかった。

さらに、(4a, b)は、(2a, b)が例証する願望構文の補部の等置構造を含んだ例文である。

- (4) a. 太郎が花子にチーズを食べてワインを飲んで欲しかった。
b. *太郎が花子がチーズを食べてワインを飲んで欲しかった。

補部の意味上の主語が主格標示を受ける(4b)の低い容認性は、(4b)で、「チーズを食べる」と「ワインを飲む」が等置構造を構成

しないこと、従って、「花子」と「チーズ」を切り離すことができない（両者が同じ中核に属している）ことを示している。逆に、(4a)は「チーズを食べる」と「ワインを飲む」が完結した単位として等置されており、「花子」と「チーズ／ワイン」が同じ中核には属していないことを示している。

上記の議論から、(2b)は補部動詞の2つの項を含む中核が上位の中核に埋め込まれた中核従位接続、(2a)は中核等位接続、中核連位接続のいずれかであることが分かる。最後に、例文(5)は(2a)の上位の中核と下位の中核は中核操作子を共有することが不可能であることを示しているが、これは(2a)が、中核操作子を共有しない中核等位接続であることを示している

- (5) 太郎が花子にワインを飲んで欲しくなかった。

(1a)が中核等位接続、(1b)が中核従位接続であるとの議論を踏まえた上で、(1)の格付与制約群が適用される、日本語の格付与領域は中核であると仮定する。(2a, b)の接続構造の同定と(1)の格付与制約に基づいて、願望構文のテ形接続の不定詞節（中核）の意味上の主語の格交替を導くことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3件）

- ①中村 渉 日本語の願望構文における格付与、日本語学会第 153 回大会予稿集、査読無、2016 年、58-63.
- ②中村 渉 現代ドイツ語の目的語代名詞の格交替—有標性同化による記述 レキシコンフォーラム 査読有 7 号、2016 年、197-224.
- ③中村 渉 「第 2 与格」対「第 2 主格」—デフォルト格としての与格／主格 Kansai Linguistic Society Proceedings, 査読有、35 号、2015 年、181-192.

〔学会発表〕（計 4件）

- ①中村 渉 日本語の願望構文における格付与、日本語学会第 153 回大会、2016 年 12 月 3 日、福岡大学
- ② NAKAMURA, Wataru A Two-Tiered Theory of Case Features: The Case of the

Hindi Case(-Marking) System, The 49th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea,. 2016年9月2日, The University of Naples Federico II, ナポリ, イタリア

③ NAKAMURA, Wataru A Neo-Jakobsonian Account of Default Oblique Cases: Instrumental vs. Dative, The International Conference on Role and Reference Grammar 2015. 2015年7月31日, ハイネリッヒ・ハイネ大学, デュッセルドルフ, ドイツ

④中村 渉「第2与格」対「第2主格」—デフォルト格としての与格/主格, 関西言語学会第39回大会, 2014年6月15日, 大阪大学豊中キャンパス

[図書] (計 0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等 該当無し

6. 研究組織

(1)研究代表者 中村 渉 (NAKAMURA, Wataru)
東北大学・高度教養教育・学生支援機構
准教授 研究者番号: 90293117

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者 ()

研究者番号:

(4)研究協力者 ()